

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.11

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201

http://www.sumiyoshi.or.jp/

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北特別事業『住吉とゆかりの作家達』(1)～(9)

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

住吉とゆかりの作家達

- 2 財団法人住吉隣保館の動き(9)～(10)

講師：高橋敏郎さん（オダサク倶楽部事務局長）

2月8日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座（市民交流センターすみよし北の特別事業）の第8回として、池田NPO法人かなえ会理事長の司会で、オダサク倶楽部事務局長で図書館司書の高橋俊郎さんのお話があった。「住吉とゆかりの作家達」と題して、「大阪文学探訪まっぷー住吉かいわいー」をもとに、住吉周辺を拠点に活躍された作家・文化人について、その多彩なこと、交友関係の深いことなど興味深いお話を聞かせていただいた。

（講演中に多数の写真を壇上の画面に示して下さいました。以下の文中に特に注記していませんが、適宜読み取って頂きたい。また、この報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。）

はじめに

今日は住吉界隈の文学ということでお話ししたいと思います。画面にマップや写真などを映しながらお話しを進めていきます。何分文学は文字でできた芸術ですので、本を読まないで、住吉界隈に住んでいた作家がどんな方でどんなことを書いたのか、住吉について書いたものがどんな風に書かれているのか、しゃべるだけではお伝えしにくいので、イメージとして作家の顔であるとか風景とかを見ながらご説明できたらと思います。

今、画面に映っているのは、明治28年に描かれた「大阪名所」という大判の名所図絵です。「住吉乃月景」となっていますから夜です。奥の方、鳥居の向こうに反橋が見えます。今は改修されて階段状になっていますので手すりを持たなくても何とか上がれますが、昔は、

手すりを持たないとズルズル滑っていくというような橋で、のちのち川端康成の小説の『反橋』にも登場しています。それが遠景で見えます。前景はまさに出発せんとする蒸気機関車です。終点で、駅員さんが立っています。明治終わりの風景で、大変綺麗な絵ですが、今日はここあたりからのお話になります。

住吉さんは『源氏物語』の漣標の巻に出きます。またそれまで俳諧師であった井原西鶴が世之介が色事のあげく南海に去っていくという浮世草子、『好色一代男』が売れた後、俳諧と決別しようとして、一夜につきつぎに何千句、何万句と俳句を詠んでいく矢数俳諧に挑んだのも住吉さんでした。というのは、住吉さんがもともとご託宣が歌で告げられるという社でもあり、歌の神様としてあがめられているということがあるからです。後々この近辺にも作家

達とか、たくさんの文人墨客が集まりました。ですから、『大阪春秋』（第142号）に「住吉大社界隈の文学 住吉っさんと小説家・詩人など」を書きました時、その出だしは「住吉大社はさながら文学の社である。」としました。西鶴も、これで俳諧と決別という時には、住吉の神に二万三千五百句を一昼夜かけて詠んでしまうという大矢数俳諧をしました。その日限りで浮世草子に邁進していったという西鶴の人生のエポックにも住吉さんは大きな役割を果たしました。

こうした近世のことども以外に、最初に鉄道を描いた「大阪名所」を出したのは鉄道の敷設が住吉にとって一つの転機となったからです。手で一軒一軒を書き上げた大正12年の「大阪市パノラマ地図」（日下わらじ屋発行）の南の端は、今宮辺りまでが描かれていて、住吉さんだけが別枠でぽつんと描かれています。南の方は田畑で、町として開けた所ではありません。住吉界隈は参詣に來たりすることもあり人は集まっていますが、もともと郊外ですから、文人墨客以外でも、市街地というような環境ではありませんでした。大正時代でもそうでした。

そこ鉄道がつくようになります。明治18年、日本初の私鉄、南海鉄道の前身であります阪堺軌道が、難波・天下茶屋・住吉・大和川北岸を鉄路で繋ぎ、ここで住吉公園の郊外住宅地というのが生まれ始めました。四天王寺と住吉大社への参詣客の輸送ということで、大阪馬車鉄道株式会社が天王寺の西門から東天下茶屋駅を開通させ、順次南へ下り住吉まで路線を延長してきました。それまで三郷の中に住んでいた文人墨客が住吉辺り、郊外に移っていくという流れになります。それでは、文学に関わる様な文化人達が住吉界隈でどんな活動したのか、誰がいたのかを中心にお話しします。

宇田川文海と墨江文学会

一番最初に我々が今でも何とか辿ることができる、その当時でも名の出ていたような文人墨客というと宇田川文海が挙げられます。あとレジュメにあります近松秋江・与謝野晶子・石濱純太郎・川端康成・橋本多佳子・村山リウ・藤澤恒夫・織田作之助・石濱恒夫が住吉界隈で活躍した人ということになります。前の画面の文学年表を見てください。薄い水色は生まれてか

ら亡くなるまでを、青い濃い部分が住吉辺りにいらっしやった、住まわれた、関係があったという時期を示しています。宇田川文海が住み始めた、石濱純太郎が住んでいた、与謝野晶子が住吉に遊びに來た、といったことを示します。川端康成の頭の部分が濃くなっているのは『反橋』のいわれということもありますので、生まれた頃に色を着けています。

住吉大社界隈を中心に今日はお話しさせていただきますが、住吉区内ということで言えば、今日お配りしたマップにありますように、北の方には、庄野英二・潤三兄弟という作家もいますし、佐藤愛子さんは帝塚山3丁目の辺りで生まれていますし、そこには美人で名高い俳人橋本多佳子さんが住んでおられました。



宇田川文海

今日はまず、最初に住吉で文学を始めた人として宇田川文海を挙げたいと思います。皆さん余り馴染みがないかもしれませんが、私もそんなに詳しくなかったのですが、宇田川文海さんが住吉で墨江文学会を作った、『墨江』という文学雑誌の創刊号にめぐり

逢うことができました。創刊号の文学会の住所は安立になっていますが、住んでおられたのが上住吉であることが分かり、中味は「墨江文学会を作っていくんだ。」というような内容ですので、時代的なことから、宇田川文海さんを最初に挙げなければいけないと思い、写真を見て頂きました。マスクをされていますが、これは、幕末、少年の頃に江戸で浪士に斬りつけられ、右の頬から胸までを斬られ、もう一太刀を左の上顎から下顎にかけて受けて、口が裂けるという深い傷を受けました。それ以降、亡くなるまでマスクを着けていらっしやったということです。どの写真を見ても大きいマスクをつけられておられます。講演も為され、しゃべられるのですから、しゃべることも食べる事も不自由はなかったかと思えます。

大阪にまだ日刊新聞がなかった時分に『浪花新聞』という日刊新聞を創刊し、その後、創刊2年目の朝日新聞に入りました。朝日新聞といえば、夏目漱石も東京から來て社友になり連載

小説を書きますが、宇田川文海も無署名で『北国奇談檐の橘』という読み物を連載します。そして連載したものを駿々堂という書店から出しました。新聞小説の初めのようなことをやられた人です。『実録小芝の山風』・『勤王佐幕巷説二葉松』を出版して有名になりました。シェイクスピアの『ベニスの商人』を翻訳した『何桜彼桜銭世中』が新聞に載って評判になり、芝居となって戎座で上演され、またそれが評判を呼び駿々堂で本になります。新聞の連載が本になるということの先駆けをしたのが宇田川文海です。『南海鉄道案内』という初めての鉄道を中心とする案内書も書いています。これは復刻版も出ていますし、図書館にもあります。『南海鉄道案内』という書名ですが、南海沿線以外の市内の名所についても案内していますから、大阪案内といえます。

これが先程お話ししました住吉に来てから出した雑誌『墨江』です。国会図書館にも残っておらず、ここに一冊あるだけかもしれません。私が私淑している肥田皓三先生が第5号をお持ちで、それを見せて頂いたのが宇田川文海に関わる発端でした。宇田川文海はそれまでは大阪市内に住んでいましたが、墨江村大字上住吉六十三に転居してきたのが58才の時ということになります。新聞で大活躍をしまして、そろそろ引退という時期になって、南の方、開けてきた住吉に移ってきたといえます。

ここで始めたのが『墨江』という雑誌を出して、墨江文学会を作ろうということです。この中に書かれている設立の趣意を読みます。「我墨江の大神は蚤に詩神を以て世に崇められ、随って此住吉の里も亦古来文学の淵叢を以て、美を一方に鳴らせしが時代の變遷の然らしむる所、王政維新以来神威は日に其著明を添ゆるも文華は月に凋落を来せり、吾人同志之を遺憾に想い私に謀る所ありしが今般其力の微かなるをも顧ず、奮って墨江文学会なるものを設立し左の事業に依って聊か墨江文学を發揮せんとす、伏して請う同感同好の紳士淑女諸君競って入会し吾人同志の事業を助け希望を遂げさせ給わんことを 大阪府東成郡安立町二丁目五十三番地 墨江文学会」と書かれています。明治維新後、文学関係でいえば凋落しているので、住吉の地から復興するのだという決意

です。住吉と文学ということ語る時には欠かせないものということになります。ただし、8号まで続きましたが、そんなに有名な人が集ったということでもなかったようです。

例えば住吉さんの近くに住み、反橋の修復工事の廃材から福祿寿を百体造り皆さんに分け与えたというので有名な田中主水・その弟の田中祥雲・劇作家の長田秋濤、後はペンネームもあってよく分からない人もたくさんいますが、こういう方が集って旗揚げをしました。明治39年ですから、明治36年内国勸業博覧会が天王寺であって、大阪が盛り上がった少しあとということになります。

石濱純太郎と墨江の邸

宇田川文海さんが上住吉で活躍した頃に住吉にやってきたのが、石濱純太郎さんです。アイ・ジョージと組んだ「硝子のジョニー」、フランク永井が歌った「こいさんのラブコール」、「大阪ぐらし」、娘さんを作詞した「紅子のバラード」などの作詞をした石濱恒夫のお父さんです。道修町で薬種商をしていた石濱純太郎さんの父、豊蔵さんが墨江に別荘を買い、石濱純太郎さんが移り住んでくることになります。石濱純太郎さんは西夏文字の研究で有名な先生です。旧制市岡中学の時に「海行かば」を作曲した信時潔や帽子を被った自画像が有名な小出櫛重が同級生だったので、ご自身も学者ですから、墨江に住み始めたころ文化人のサロンのような感じになりました。石濱恒夫さんも住み続けられて、現在の墨江二丁目の五のメゾンいしはまやというマンションの場所が石濱家です。中庭には、石濱純太郎さんの生誕100年を記念して建てられた西夏文字の記念碑などもあります。そこに移り住んだのが、もう一つの住吉のエポックということになってくると思います。

石濱純太郎さんの奥さん石濱恭子さんについては後で浅沢句会の所で触れます。長男が石濱恒夫さんです。昔は鬱蒼と茂る森のような庭に包まれたお宅があり、そこに離れがあって、藤澤恒夫さんが東京から療養を終えて住まわれていました。石濱恒夫先生が亡くなられたのが平成16年、80才でした。体を悪くされていて、車いすで散歩されるのを見かけられた方もあると思います。

旧制天王寺中学・旧大阪高校・東京帝国大学に進まれます。離れに住んでいた藤沢桓夫さんが川端康成先生と昵懇でしたので、学生時代に紹介されて川端康成先生に弟子入りします。川端先生は、毛筆で原稿を書かれ、川端康成自筆本といったものも出版されていますが、書き損じが多く、段ボール箱1箱ぐらい溜まると石濱さんに風呂の焚き付けにせよと仰ったそうです。今なら自筆原稿は大変高価ですが、純朴な石濱先生はそのままたき付けになさったそうです。川端先生に書生として入った、唯一の弟子と言えるかもしれません。川端先生がノーベル賞を受賞された時に、随行していったのが石濱さんで、ストックホルムで2人で撮られた写真も残っています。

石濱恒夫さんは初め小説家をめざしたり、作詞をされたりして、歌では随分有名になりました。昭和58年にお書きになった『大阪詩情 住吉日記・ミナミーわが街』は前半が住吉、後半がミナミのことに分かれています。住吉に生まれてずっと住んでおられて、結婚された時に西区西長堀のマンモスアパートに入られました。これは東京の晴海アパートと一緒に、日本で初めて公団がマンション風アパートを建てたものです。石濱先生は真ん中辺りの10階に住んでおられ、南が見渡せて、住吉辺りまで見えるかもしれないという高い建物でした。今もそのまま残っています。その部屋の西の端に少し遅れて入られたのが司馬遼太郎さんです。司馬さんは当時の雑誌に「アパート住まいの作家達」を書いておられます。住んでみたところ、土佐藩所縁の白髪橋や土佐稲荷神社が目の前にあり、岩崎弥太郎が悪者として扱われているが、大変興味を持ったと書かれています。その時書かれたのが『竜馬が行く』です。『竜馬が行く』には坂本龍馬が土佐から山を越え、徳島から船に乗って天保山辺りまで来て小さな船に乗り換え、木津川を遡上して長堀川に入り市内に入っていくという事になっています。長堀川に入って、土佐稲荷で鯉座橋の所で小舟を下りる、と実際には無かったようですが、さもあったように書かれました。それまで土佐では有名で、勤王の志士として知られてはいましたが、全国的にはそんなにイメージのなかった龍馬が司馬遼太郎さんの『竜馬が行く』で有名になりました。

少し余談になりましたが、ここに住まわれた石濱先生が、ミナミについても色々お書きになり、住吉分と合わせて一冊になったのが『大阪詩情 住吉日記・ミナミーわが街』です。私が住吉で講座を持つ時に導いてくれたのもこの本です。この中に、石濱先生が物心がついた頃から見聞きした文人墨客を網羅的に書かれています。今日のレジュメにも挙げておきましたが、小出楯重・信時潔・武田麟太郎・伊東静雄・織田作之助・離れに住む藤沢桓夫さんの所に来る人達についても書いておられます。



川端康成『反橋』

重要なのは川端康成『反橋』です。『住吉』・『しぐれ』・『反橋』が住吉三部作といわれています。天満天神の社前で生まれ、お父さんがすぐに亡くなり、お母さんも亡くなって、茨木市でおじいさんに育てられ、旧制茨木中学・東京第一高等学校に行き浅草に住み、『浅草紅団』を書かれています。『反橋』を書かれる発端になった経緯が『大阪詩情』に書かれています。昭和21年ごろ一人でふらっと石濱邸に訪ねてこられ、石濱純太郎さんと恒夫さんとが夕食でお酒を酌み交わしていると、「うらやましいですね、ぼくにはそういう親子の経験がないですヨ」と仰ったと書いておられます。旅館錦戸に泊まれ、翌朝、住吉大社を横切り、反橋を上って南海の駅に行く、という時に反橋の上で、「小さいとき、母に手をひかれて渡った記憶がぼんやりとあるヨですヨ、母は、お宅のへんに縁があったらしいッですヨ」と仰ったとのこと。その1年ちょっとあとに書かれて発表されたのが『反橋』です。反橋の上で、実は私はあなたの母親ではないと告げられ、怖くて下りられないといった内容です。出だしは「あなた

は何処へおいででしょうか。」で始まり、中に『梁塵秘抄』から取った句が出てきます。藤澤桓夫さんの所へも前日に行っているのですが、川端さんが、今も藤澤家に残っている菊池寛の『梁塵秘抄』の一節を書いた色紙を見て、「いい色紙がありますね、私は菊池さんの色紙は一枚も持っていません。」と仰ったと藤澤さんが書かれています。『反橋』の中で主人公がある友達の所へ行って『梁塵秘抄』の額がかかっているのを見て、という設定と重なっています。川端さんは大阪市内について余り書かれておられず、有名になられてからも余り大阪に帰りたがらなかったといわれていますが、『反橋』はそんな中でも、短編ですが出色の作品です。読み返して頂けたらと思います。石濱恒夫先生はわざわざ、「それはし」とふりがなをうっておられます。本来は「それはし」というのだよということでしょうか。反橋のたもとに「反橋は上るよりも下りるほうがこわいものです。私は母に抱かれて下りました。」という一節の碑が建てられています。住吉ゆかりの作家として欠かせない方です。

藤澤桓夫 終生大阪をはなれず

その川端康成さんを石濱恒夫さんに紹介したのは藤澤桓夫さんです。藤澤桓夫さんがなぜ石濱純太郎さんの所に住んでいたのかということ、おじさんのところに来ていたのです。自分のお母さんが石濱純太郎さんのお姉さんにあたります。今宮中学・大阪高等学校・東京帝国大学へ進まれました。友達だったのがプロレタリア作家の武田麟太郎などで、武田は同人誌『大学左派』を始めたメンバーでもありました。雑誌「戦旗」の編集員が後の漫才作家秋田実さんでした。藤澤桓夫さんは胸を悪くして、『蟹工船』の小林多喜二が惨殺されたりするちょうどその何年かを富士見の療養所で過ごすことになり、転向に苦悩した作家、簡単に転向した作家、そのまま獄中に入った作家がいたりする時代に、渦中にはなく大阪に帰ってきます。漢学の学問所、泊園書院で多くの人材を育てた藤澤南岳を祖父に持つ家系ですので、武田麟太郎から「おまえは生まれがよいからプロレタリアートではない。」と嫌みを言われたと後に書いておられます。大阪に帰ってくる時に、『日刊工業新聞』と一緒にやっていた『夕刊大阪』、後に織田作之助も勤め作家への出だしはこの新聞

ですが、この新聞を菊池寛に紹介されます。紹介された編集者後藤某に、大阪に帰るについてこんな風な小説を書きたいと送った手紙を、私がネットで見付けまして、先月入手することができて感激しました。大阪に戻り、叔父の石濱純太郎の離れに住み、結婚して上住吉に移られますが、亡くなるまで大阪から一步も出られず、新幹線にも乗られたことがありませんでした。織田作之助が『読売新聞』に「土曜夫人」を連載しましたが、京都での一昼夜を60回ぐらいかけて書くというような実験的な作品で、京都から舞台が東京に移ります。藤澤桓夫さんは、「東京に行ったらあかん、死ぬで。」と止められたそうですが、織田作は行って、案の定その後3月ほどで死んでしまいます。藤澤さんは昭和16年に「新雪」を『朝日新聞』に連載したのが本になり、映画になり以降活躍されました。

これは現在のお宅の辺りで、この奥にあるのが「西華山坊」と名付けられた書院で、そこで執筆されていました。これを設計したのが小出楢重の息子小出泰弘さんです。藤澤先生の執筆の様子が先程見て頂いた写真です。

この色紙「法善寺舞台のような雪降り」は藤澤桓夫さんが書いたものです。織田作之助の句ではないかと仰る方があるかもしれませんが、織田作之助が藤澤桓夫さんのまねをしたのです。織田作之助はある一時から、藤澤さんに出会ったあと、字の形も藤澤さんに似たり、煙草の吸い方が、指の間に深く挟むという藤澤さんの吸い方に変ったといえます。此の句も織田作之助がまねをして自分の句のように書きました。

浅沢句会

画面に映っているのは一運寺です。大石内蔵助良雄の墓があつたりします。藤澤邸を建てる時に、残っていた純和風の立派な門は、小出泰弘さんの建てる西華山坊には立派過ぎるということで、当時山門のなかった一運寺の山門に寄贈されることになりました。石濱邸の離れに住む藤澤桓夫さんのところに頻繁に通ってきたのが織田作之助で、将棋を指したり、句会に出たりしていましたが、「法善寺ここが思案の善哉かな」という句の碑が法善寺横町の正弁丹吾亭の前に建っています。浅沢句会とい

う石濱純太郎さんの奥さん石濱恭子さんが始めた句会があり、織田作之助はそこに北野田から南海電車に乗って来ていました。住んでいた野田村丈六に因んで「丈六」を俳号にした句があったりします。秋田実さんもきていますし、いろんなメンバーが句会に参加しています。

今日は後で蓄音機もやりますが、私が蓄音機をやる時には織田作之助の格好をして織田草之助名乗って、オダクサと呼んでくれといつも言っているのですが、私が自分で勝手に師匠と思っているのが織田作之助です。

さて、次に佐藤愛子さんの写真が出てきました。住吉公園の所に「どこかで春が生まれる・・・」という詩を作った^{ももた宗治}百田宗治が住んでいて、藤澤桓夫さんが会いに行かれたところ、帝塚山3丁目に佐藤紅緑が住んでいて金子光晴も来ているので呼び出そうということになります。まだ藤澤先生が高校生の頃です。旧大阪高校の人達が作った新感覚派に属するような『辻馬車』という同人誌を出したのが藤澤桓夫・^{ながはまこと}長沖一・武田麟太郎といったメンバーです。高島屋の近くの波屋書房の主人、宇崎祥二がバックアップしました。残念ながら武田麟太郎が巻頭言で橋本スミという名前でアナーキストを揶揄するようなことを書き、宇崎祥二さんがアナーキストの青年に狙われて襲われ、体を悪くしてしまうということがあります、『辻馬車』はなくなってしまいました。

佐藤紅緑が住んでいました帝塚山3丁目で生まれたのが佐藤愛子さんで、つまり佐藤愛子さんは住吉出身の作家です。彼女の小説『血脈』は佐藤紅緑、非常な不良だった兄サトウ・ハチロウなどについて書かれた長編小説です。自分のお母さんで、佐藤紅緑の2番目の妻三笠万里子が女優になりたいと東京に出てきて、日本劇団を作り島村抱月とライバルになるような形で頑張っていた佐藤紅緑に会いに行き、弟子にして欲しいといった所から『血脈』は始まります。

彼女が入ってきたがため佐藤家がガタガタになっていきます。三笠万里子はもともと大阪の人ですので住吉に戻り、佐藤八郎のお母さんであったその当時の奥さんと別れて、三笠万里子と一緒に住みますのが帝塚山3丁目です。ですから『血脈』の最初の場面で

住吉に来た頃が書かれています。長編ですので、文庫本の三巻本の上に住吉が出てきますので、お読みになったらおもしろいと思います。

ニッターレコード

浅沢句会といいましたが、浅沢神社の近くにあったのがニッターレコードです。文学とは直接関係ありませんが日本蓄音機商会などともライバルになる西の雄といえるニッターレコードが、浅沢神社の西隣、住吉大社の南の鳥居の前にありました。ここが出したのが「赤い灯、青い灯」という『道頓堀行進曲』で、今に伝わる大阪で一番有名な歌といわれます。このそばに住んでいたのが、横山エンタツで、アチャコとコンビで、それまで着物だったのを背広を着て立ってしゃべくるといってしゃべくり漫才というのを始めました。「早慶戦」が一番有名ですが、そのころからエンタツと一緒に漫才の原作を書いたのが秋田実さんです。

秋田実さんは『戦旗』の編集をしていましたが、帰って来て藤澤桓夫さんの紹介で吉本に入ることになります。長沖一さんも東京から戻ってきて藤澤さんの関係で吉本に入ります。戦後アチャコで「お父さんはお人好し」があたり、放送作家として有名になっていきます。この3人が同級生でコンビなのです。一時プロレタリア文学運動に加わりましたが、大阪に帰ってきて、今に伝わります大阪



的な笑い大阪らしい文学・小説を作っていたのがこの3人で、大阪人は忘れてはいけない3人です。秋田実さんと長沖一さんは阪南町ですから阿倍野区に入りますが、文化的には同じ住吉の文化圏的とも言えます。

それでは、ニッソーレコードが出しました『道頓堀行進曲』と『漫才早慶戦』を、ニッソーレコードが製造しました一番小型の蓄音機を持って来ていますので、ひとつ聴いていただきたいと思います。松竹座で岡田嘉子一座の寸劇の劇中歌として歌われたのが『道頓堀行進曲』です。最初、劇そのものを吹込んだレコードが出ましたが、筑波久仁子の歌の所だけぬいてプレスされ大変売れました。

(『道頓堀行進曲』が流される。)

次は漫才の「早慶戦」です。吉本せいさんが「ラジオで漫才や落語をしたら寄席に来る人間がおらへんやないの」と反対していたけれど、ラジオで流れ始めると実物を見たいとはやり初めて解禁になったという切っ掛けになったのが「早慶戦」だと聞いたことがあります。

(「早慶戦」が流される)

テンポと書き手がちゃんとして、名作と言われた早慶戦です。エンタツはニッソーレコードの近くに住んでいましたから、歩いて吹込みに行ったんでしょうか。ニッソーレコードは漫才・浪曲・浄瑠璃などのレコードを出していましたが、中で画期的なのが『浪花隊顛末』などを書きました長谷川幸延さんがBK(NHK 大阪放送局)ラジオのプロデューサーをされている時に道頓堀などの実況録音をされましたが、その実況録音盤『今昔浪花の華』をニッソーレコードがプレスして出しています。

(『今昔浪花の華』が流される)

こういうものを出していたのがニッソーレコードですが、住吉の誇るべきものです。

近松秋江 『青草』

ほかには近松秋江がいました。岡山県の人ですが、市立大阪商業学校、現在の大阪市立大学を受験しましたが失敗して、早稲田の文学部に入り小説家になりました。初めの筆名は徳田秋江でしたが、安治川から船に乗って別府に行くといったことを書いた『西の旅』の作者、徳田秋声と間違えられるのはいやだということと、近松が好きだったので近松秋江と改めました。情痴小説のはしりと言われ、女性との関係を書いたり離婚をしたり難波の新地にいたり色々します。住吉新地にい

る時に女性が尋ねてくるといったことを書いた小説『青草』を書いています。住吉公園から鳥居前まで歩いてくる、草原を抜けてくる、そこで女性がおしっこをして、翌日そこに青々と草が茂っていたといったことが書かれていて『ホトトギス』に発表されました。住吉新地ということになると住之江区に入りますが、読んでみると、当時の開け行く住吉の情景が描かれていて、名文と言われている。

『源氏物語』 与謝野晶子

『源氏物語』に影響された作家と言えれば非常にたくさんいます。住吉公園に建っているのが濡標の巻の一節を描いた碑です。光源氏が昇進してたいそうな行列で住吉詣に来ます。それに明石入道の娘、明石の上が出会います。かつて恋心を抱きながらむすばれなかった光源氏に遠くから、声を掛けようと思ってもかけられず去っていく。それを後で光源氏が知るとというのが濡標の巻です。当時、住吉詣はたいそう絢爛に行われましたがそれを舞台にした碑が建っています。

与謝野晶子も「与謝野源氏」と言われるように源氏物語の現代訳を出しています。写真は我孫子前からの方が近い安養寺です。この安養寺に与謝野寛は養子にやられます。京都生まれ(父は京都府与謝郡出身)で神童と言われ、13才の時に自分で鉄幹と名乗り始め、歌人となり有名になります。浪華青年文学会が浜寺公園で会合をするという時に晶子と鉄幹がはじめて出会います。晶子と年ごろもころあいで、話し相手になる女性を呼ぶということで呼ばれたのが山川登美子です。2人の恋のさや当てです。

3人で住吉さんに遊びに行こうということになり出かけてきます。住吉の反橋のある池のところで、鉄幹が矢立を出し、筆を執り、蓮の葉の裏に「神もなほ知らじとぞ思ふなさをば蓮の裏に書くかな」と書きます。月明かりでそれがほのかに見えます。連歌ですので鉄幹がさらに「後の世は誰に半ばを分かつとや」と付けると、晶子は「若き師ならで並ぶ人なし」と続けます。山川登美子は「後の世を待つはもどかし現世に」と返します。川端康成はお母さんに手を引かれ上りましたが、ここに至るまでに反橋を渡る時に鉄幹は手をさし出しますが、晶子は

その手を取らずに自分で上り、登美子はすがるのですね。この後晶子は鉄幹と結ばれます。

「妻を娶らば才たけて」と一世を風靡し、『明星』で華やかだった鉄幹も晶子と一緒にあったあと影が薄く、晶子の方が強いように私たちは思っていますが、90幾つでご健在の娘さんが仰るには、家では、晶子さんは鉄幹のことを師と仰ぐ姿勢だったそうです。「句を作りますと『先生見て下さい。』というのが母が父に対する態度でした。」と仰っています。一番最初に連歌をした時に「若き師ならで並ぶ人なし」と詠ったことからでも分かる気がします。この写真は教育を自由にという発想で文化学院を創設した頃の2人の写真です。

粉浜周辺の文化人

後は粉浜の方に移っていきます。住吉大社にも「住吉に齋く祝が神言と行くとも来とも船は早けむ」という万葉の歌碑があつたりしますが、犬養万葉節で有名な犬養孝さんが旧制大阪高校学校・大阪大学で教鞭を執っておられる頃に粉浜に住んでおられました。その縁と言うことで南海粉浜駅前に粉浜を詠った万葉の「住吉の粉浜のしじみ開けも見ず隠りてのみや恋ひ渡りなむ」という詠み人知らずの歌の碑が犬養先生の字で建っています。鉄道が高架になる時につぶされましたが、ハマユウが大好きで、お庭が一面花で埋まっている時は電車の中からも犬養さんのお宅だと分かったそうです。

もう1人粉浜に住んでおられたのが村山リウさんです。この方は、発端は上町の旧婦人会館で活動する中で評論家みたいになり、もともと『源氏物語』が好きだったので『源氏物語』をしゃべりながら皆さんにお聞かせするという「説き語り」で一斉を風靡されます。医師と結婚して粉浜東之町に移り住みましたが、夫が市内に開業します。しかし昭和20年3月14日の大阪大空襲で焼け出され、また粉浜に帰ってこられます。『源氏物語』縁の住吉大社の近くに住まれたということになります。

落語家で言うと、6代目笑福亭松鶴さんが住んでいました粉浜の長屋を鶴瓶さんが残されて、「無学」と名づけいろんな催しをされています。仁鶴・鶴光・福笑・松喬・松枝・呂鶴・鶴瓶といった弟子達が坂を上って通ったり、住み込んだりしました。今病気でお休みですが、

松喬さんは天王寺区真法院町にお住まいで、すぐ近くに笑福亭一門の墓所、紅葉寺で有名な壽法寺があります。

6代目の墓もあり、カップ酒が備えられています。松喬さんも粉浜の6代目宅に通われていました。長く車の運転手をされたり、訛りが直らず、どつかれどつかれしながら、苦労したというようなことを去年出された『おやっさん—師匠松鶴と私』という本に書かれていて、その頃の様子が分かっておもしろいです。

おわりに マップを利用して

この写真は反橋の近くにある西鶴の碑です。方々に同じような形で建てられていますが、大矢数俳諧をしたという縁で建てられています。

次は天満宮にもありますが、住吉さんのお文庫です。享保年間から大坂の書籍商、書肆が集まりまして、一冊でも発行したものについては、組合でお文庫に納めようということになりました。言うなれば、図書館の発祥といえます。

このあと、その他の住吉区内の作家達ということでご紹介します。帝塚山の近くでいいますと万代池の所に住んでおられたのが、庄野英二さんで、帝塚山学院の初代の学長がお父さんです。ご長男は亡くなったようですが、英二さん・潤三さん・至さんのご兄弟です。

この写真は庄野英二さんのお家です。もちろんもうお亡くなりましたが、今も「庄野英二」という表札がかけられています。庄野英二さんには『にぎやかな家』という作品があり、この辺りに住まい始めた頃のお話も書いておられます。この写真で家の前を走っているのが熊野街道です。この奥の方に帝塚山学院の学長さんもされた大谷晃一さんが住んでおられました。帝塚山学院縁の人々ということになります。次の写真は、庄野英二さんと鍋井克之さんです。鍋井さんは大阪出身の有名な画家ですが、住吉大社の南門、ニッソーレコードの近くに田村孝之介さんという画家が住んでおられ、大阪の作家の出す本の装丁画はたいていこの2人で描かれています。織田作之助や藤澤桓夫さんののもそうです。

小さい写真ですが、佐藤紅緑が住んでいた帝塚山3丁目に紅緑より少し後に住んでいたのが俳人の橋本多佳子さんです。石濱純太郎さんの奥さん石濱恭子さんが主宰され、藤澤桓夫さん

も参加されていた浅沢句会に参加されていました。藤澤桓夫さんは50才過ぎて、20何才かの典子さんと結婚しましたが、典子さんは川柳作家の娘さんでもありましたので、橋本多佳子さんの『七曜』という俳句雑誌にも参加されました。橋本さんは奈良の方へ移って行かれました。

これは、遠里小野団地の方です。堺に生まれ、ここに住み今宮高校へ通っていてパンク歌手として有名になったのが、町田康さんです。織田作之助に思いがあり、『夫婦茶碗』というような作品を書き作家としても有名になっています。

これが大阪市立大学で近くに学生結婚して住んでいたのが開高健・牧羊子さん夫婦です。

これが住吉街道にあります池田屋、住乃江味噌です。

今日お配りした「大阪文学探訪まっぷー住吉かいわいー」のイラストを池田杏花さんがお描き下さり、写真は、かなえ会で活動されている島田浩三さんの写真を使わせて頂きました。マップに載っている作家について、全部はご紹介出来ませんでした。住吉大社近辺・住吉区の作家について駆け足でご紹介しました。それぞれがどんなことを書いているのか興味を持っていただき、豊かな文学鑑賞の導入になるのが、文学散歩や文学講座です。普段している講座では、中味を読んだり、本を紹介させて貰ってもいます。実際読んでみなければ、分からないことがあります。人物だけ知ってもその作品を読んでみたことがないということもあると思います。図書館でそれぞれの作家の作品をお借り頂いて目を通して頂ければ、さらに住吉の辺りが色濃く彩りよく見えてくるかと思えます。

財団法人住吉隣保館の動き

「住吉地区の昔と今」の展示パネルをリニューアルして

「住吉地区まちづくり委員会」は昨年12月に、それまで市民交流センターすみよし北の1

階に展示していた「住吉地区の昔と今」の展示内容をリニューアルしました。

今回のリニューアルに際して気をつけたのは次の4点です。まず、展示パネルの下にある住吉地区の模型を活用した点です。ついで、昔と今の住吉地区の状況をうつした写真パネルを5組作成し、それらを上下に配置して対比させた点です。さらに、1973年11月に策定したマスタープラン（総合計画）の中核をなす6つの原則を記載した展示パネルを作成した点です。最後に、住民の語りから昔の住吉地区の状況を再現した点です。

模型は1969年の「同和対策事業特別措置法」の制定を受けて1973年11月のマスタープランの確認により町づくりが飛躍するなかで作成されたもので、それは現在の住吉地区の町並みの原型となるものです。今回のリニューアルではその模型に5つの黄色い番号札を新しく配置しました。それは、模型の上に展示されている住吉地区の今昔を対比した5組の写真パネルに付された通し番号に対応しています。さらに、その5つの黄色い番号札は、6つの原則を記載した展示パネルにある住吉地区の町並みを写しだす地図に描かれている1から5までの黄色の番号にも対応しています。これにより見学者は住吉地区の今と昔の変化を写真と地図さらに模型という3つの展示を通して確認することができます。

最後の、昔の状況を知る住民の語りの4つのパネルでは、共同水道、共同便所、ガス・水道敷設工事、町内の各種のお店という4テーマに関する語りが写真とともに併記されています。それは当時の状況を知る現在の住吉地区住民からの聞き取りによる語りで、厳しい生活をのり超えてきた先人たちの知恵が、それぞれのテーマにもとづいて明らかにされています。

ご来館の折りは、リニューアルされた展示パネルを是非ご覧ください。また、展示パネルに対するご意見・ご感想などございましたら財団法人住吉隣保館の事務局までご一報いただけますと幸いです。

友永雄吾

リニューアルされた展示パネルの様子





催し物のお知らせ

「全国水平社創立90周年と松本治一郎」



1922年3月3日、京都の岡崎公会堂で全国水平社が創立されました。そこで採択された「水平社宣言」は、日本の最初の人権宣言として、今日まで多くの人びとに深い感銘を与え続けています。

水平社宣言の精神を踏まえ、その伝統を引き継いだ

部落解放運動は、部落差別の撤廃を中心的な目標としながらも、日本はもとより全世界から一切の差別撤廃と人権確立を求めた運動を積み重ねてきています。

その運動の中心に、松本治一郎（1887～1966）さんがおられました。松本さんは、長らく部落解放運動のリーダーを務めただけでなく、衆議院議員や参議院議員としても活躍し、日本と中国の友好運動を切り開く上でも大きな功績を果たされました。

世界と日本の人権状況を直視したとき、90年に及ぶ部落解放運動と松本治一郎さんの足跡から学ぶことは少なくありません。

その一環として、差別撤廃と人権確立を求め続けた松本治一郎さんの生涯を『水平記』とのタイトルでまとめられた作家の高山文彦さんをお招きし、講演会を開催します。

日時 4月22日(日) 13:30～15:30

定員 申込先着200名

費用 500円

講師 高山文彦さん(作家)

申込先着 200名

お申込み方法

直接来館・電話・FAX・ハガキ・Eメール・ウェブサイトのいずれかにて、お申し込み下さい。

FAX、ハガキの場合は「講座名（全国水平社創立90周年と松本治一郎）・郵便番号・住所・名前・年齢・電話番号」を明記し、市民交流センターすみよし北までお申し込み下さい。

申し込み先

市民交流センターすみよし北
〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東 5-3-21
TEL 06-6674-3731/ FAX 06-6674-3710
メール: koza@sumiyoshikita.jp
H P ア ド レ ス :
<http://www.sumiyoshikita.jp>

—訂正—

前号(財団法人住吉隣保館ニュースNo.10)、「財団法人住吉隣保館の動き」の追記部分について誤字がございましたので、訂正をさせていただきます。『公益財団法人住吉隣保事業推進協会』とありましたのを、正しくは『公益財団法人住吉隣保事業推進協会』となります。

財団法人住吉隣保館ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>